実践地域が語る、地域循環共生圏づくりのリアル

ー第12回寺子屋ローカルSDGs開催レポートー

地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業では、地域循環共生圏づくりを通して地域を元気にしたいと考える地域や企業が、ともに学び、つながり合う場として「 寺子屋ローカルSDGs」というコミュニティをつくっています。

第12回は、一般社団法人Reborn-Art Festivalの松村 豪太さんと、宮古島市役所 企画政策部エコアイランド推進課の友利 翔太さんをお招きし、『地域の活動者に聞く 石巻×宮古島の対談 ～"地域循環共生圏に取組む"とは～』をテーマに対談形式で開催しました。

その内容をレポートします。

一般社団法人 Reborn-Art Festival　松村 豪太さんプロフィール

*1974*年石巻市生まれ。東日本大震災で自身も被災するが、被災地からクリエイティブな地方都市のモデルを作るべく*ISHINOMAKI2.0*を発足。復興に留まらないまちづくりのアイデアを次々と実行し、まちの内外の様々な立場の人々をつなぎながら石巻のバージョンアップを目指す。コミュニティ*FM*のパーソナリティ、とりあえずやってみよう大学学長、地方型総合芸術祭*Reborn-ArtFestival*事務局長など多彩な横顔を持ち、近時は関係人口の創出やローカルベンチャーの推進に力を入れる。

宮古島市役所　企画政策部エコアイランド推進課の取組紹介（今回は、課を代表して友利　翔太さんに登壇いただきました）

宮古島市では、*2008*年に「エコアイランド宮古島宣言」を行い、持続可能な島づくりをすすめている。*2021*年から「せんねんプラットフォーム」として運用をスタートし、翌年*2*月には「せんねん祭（千年先の宮古島市に向けた、アイディア発表イベント）」を開催し、二人の市民からアイディアが発表された。今後も、市民との対話を通して、市民のアイディアを実行することのできるプラットフォームとして継続を目指す。

オープンかつフラットな姿勢で、多くの人を巻き込む。芸術祭Reborn-Art Festivalをはじめとする、石巻の取組

松村：はじめに、Reborn-Art Festival や石巻での取組についてご紹介します。

3.11の頃、僕はスポーツのNPOクラブマネージャーをしていました。実は当時、僕は石巻という町が大っ嫌いでした。地方都市はどこでもそうかもしれませんが、閉鎖的だったり、しがらみが強かったり、保守的だったりするところが嫌でした。そして、それに対して「嫌だね」ということを影からうじうじ文句を言うような人間だったんです。

もともとソーシャルな立場だったこともあり、震災の時はブログにコメントをくれる方が多くいました。そうした方々と一緒にボランティアで泥かきをしているうちに、プチボランティアセンターのような役割を果たすようになっていました。

その活動の中で特に気が合ったクリエイティブな人たち、例えば建築家・都市計画の専門家・広告代理店のプロデューサーなどと、壊れた旅館の2階で夜な夜な、泥から掘り起こしたお酒を酌み交わしては語り合っていました。私たちはこれを「闇鍋」と呼んでいました。

闇鍋をやっているうちに、「うじうじ文句を言うだけではなく、今だったら自分たちでこの街を変えられるんじゃないか」と思うようになり、ISHINOMAKI2.0という実験的なまちづくりの取組をスタートしました。

ISHINOMAKI2.0では、オープンかつフラットであることを大事にしています。

僕ははっきり言って、地元原理主義が嫌いなんです。地域で活動をしていると、ともすると地元でやることが絶対の正義という考え方に陥りがちです。そうではなく、もっとフラットに、地域に関わりたい人が関われる状態を作ることが大事だと考えています。

こうした姿勢で活動をしてきた結果、様々な方とプロジェクトをできるようになりました。

その中に、音楽プロデューサーの小林武史さん率いるap bankという団体があります。彼らは、泥臭い復興支援にもすごく力を発揮してくださりました。

小林さんは、一時的な復興支援だけではなく持続可能な取組にすることに、早くから問題意識を持たれていました。そこで、「ぜひ石巻を起点に何かしましょう」と相談し、ap bankを中心にして始まったのが芸術祭Reborn-Art Festivalです。

2015年に実行委員会を結成し、僕が事務局長をしています。2016年にプレイベントの音楽フェスを開催し、2回の本祭を開催してきました。今は、3回目の本祭を新型コロナの影響も鑑みて2期に分けて開催し

ています。後期は2022年4月からを予定したのですが、オミクロン株の感染者拡大を踏まえ、2022年8月20日～10月2日に延期して開催することにしています。

第1回は延べ26万人、第2回は延べ44万人と、沢山の人が参加してくれました。ですが、Reborn-Art Festivalは「大きなイベントを開催して、沢山参加してくれてよかったね」ということだけを目的にしているわけではありません。

クリエイティブで多様な循環を被災地から創出することを目指しています。例えば、若者とお年寄り、地方と都市など、一見矛盾するような要素が関わり合い、循環を生み出すお祭りでありたいと思っています。

地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業には2019年から2020年までの2年間、環境整備でお世話になり、今年度は事業化支援でお世話になっています。

Reborn-Art Festivalを中核におき、このようなマンダラ図を作成しました。ローカルベンチャーの推進や、増えすぎた鹿による食害を解決し新しい地域の産業をつくるためのジビエの取組などを行っています。

今年度、取組んできたことをご紹介します。

まず、持続可能な食のあり方を考えるシンポジウムを開催しました。100人を超える方に来場いただき、さらにオンラインで3000人以上の方に視聴いただきました。並行して、このシンポジウムのアイディアを具体的にアウトプットする夜市も開催しました。川辺で屋台を広げ、1日に500人を超える方が来てくれたことで、これまでと違う視点で場を使うことの可能性も感じました。

また、このシンポジウムで出たアイディアをもとに、ガストロノミーツーリズムを実験的にやってみました。二つ星を獲得したお店のトップシェフや、DEAN & DELUCAの方に来ていただき、地元の料理人・生産者さんと共に、食の体験を企画いただきました。

また、スタディツアーを首都圏の高校向けに開催してみました。ローカルベンチャーの皆さんに協力してもらったのですが、満足度高いツーリズムのプロトタイプをつくることができたと思います。

さらに、シェフ・漁業関係者・加工業者と連携して地域資源を活用した商品開発にも取組みました。今年度やってみて実感したことは、なんだかんだ泥臭いマメなコミュニケーションが大事だということです。未利用資源に着目して検討をスタートしたのですが、意外と未利用の魚は少ないことや、これまで食用として利用されていないものにはそれなりの理由があることが分かりました。

こうした現実を知った上で、これからも継続的に未利用資源を使った商品開発に取り組んでいこうと考えています。甲谷さんという御年90歳越えの現役の漁師さんがいらっしゃるのですが、「もっと若い人に来て欲しい、外の人に来てほしい」ということを発信しています。こうした方とチームを組みながら、今後もサステナブルな取組を行っていきます。

オーバーツーリズムが地域循環共生圏づくりのきっかけになった宮古島市。市民との対話を通じて生まれたビジョンと「せんねん祭」

友利：宮古島市は人口約55,000人の平坦な島です。大きな山や河川が無く、台風や干ばつを受けやすい厳しい自然環境にあります。そのため、水の確保は地下水に頼っています。1972年に本土復帰を行った時から、インフラが整備されはじめ、地下ダムができ、島の中で水を貯めて農業に活かせるように発展してきました。

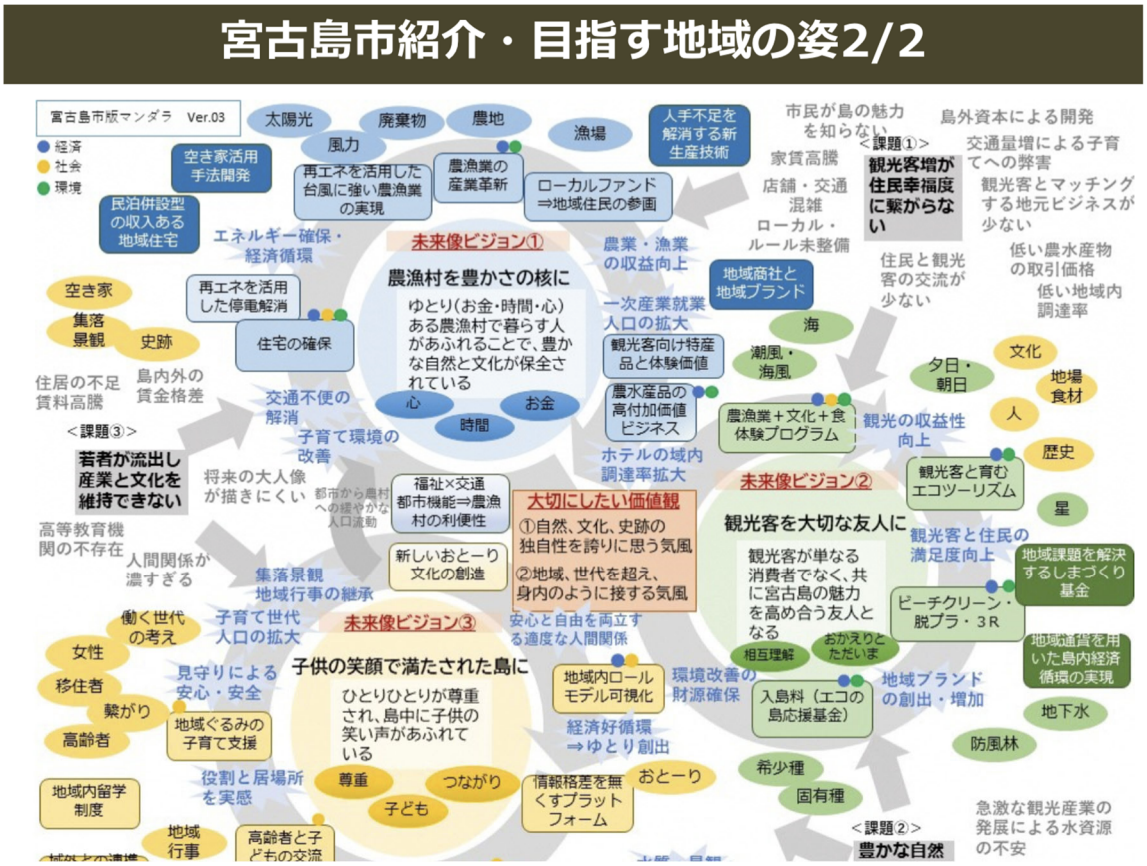
こうした背景もあり、地下水を大切に思っている島なのですが、平成元年に硝酸態窒素濃度の上昇がありました。硝酸態窒素濃度が10mg/Lを超えると飲み水として飲めなくなってしまうのですが、9.2mg/Lまで上昇し、危機的な状況になりました。

この出来事を経て環境への意識が高まり、2008年に「エコアイランド宮古島宣言」を行い、環境に対する取組を進めてきました。

地域循環共生圏づくりに取組む大きなきっかけになったのが、オーバーツーリズムです。

宮古島市は観光誘致に積極的に取組んできました。伊良部大橋が出来たことや、インバウンドの波もあり、急激に観光客が増えました。それにより、ホテルも沢山できて、従業員の方のマンションも増え、経済的には潤ったのですが、宮古島に住んでいる人にとっては、住みづらい状況になっていました。

地域循環共生圏づくりのビジョンづくりにあたっては、市民と沢山の対話を重ねてきました。自然と文化、人と人との関係が近い島です。こうしたところを大切にしたいという気持ちで、「農山村を豊かさの核に」「観光客を大切な友人に」「子供の笑顔で満たされた島に」というビジョンを掲げました。



今年度は「せんねん祭」を中心に、「せんねんシネマ」「せんねんトーク」「せんねんミーティング」など、様々なイベントを行ってきました。個別のイベントとしても参加できますが、それぞれに相乗効果を持たせることを意識しています。「せんねん」は、エコアイランド宮古島の標語「1000年先の未来へ」からとっています。

「せんねんシネマ」は、ソーシャルシネマと呼ばれる社会課題を扱う映画を市民の方々と鑑賞し、その上で対話をするイベントです。

「せんねんトーク」は宮古島市内で持続可能性に関する活動をしているゲストを呼び、事務局との対話を通して、持続可能な島づくりについて考えられるイベントです。

「せんねんミーティング」は「せんねん祭」に紐づく取組です。「せんねん祭」は1000年先の宮古島市に向けた市民アイディアを発表するイベントです。そこで発表する方々のアイディアを事務局と一緒にブラッシュアッ

プしていくのが、「せんねんミーティング」です。この様子をオンライン配信することで、せんねん祭に向けてどのような取組が行われているのかを知ることができるようにしました。

「せんねん祭」は、2022年2月20日に開催しました。ここでは、1000年先の宮古島市に向けたアイディアを、お2人の市民に発表いただきました。まず、市民の方のアイディアを、自分の言葉で発信する機会をつくれたことが事務局として嬉しかったです。

この発表に対する市民の賛同や応援の声は、Googleフォームを活用して届けられるようにしました。このフォームを通して集まった声は約400件にもなりました。

今後は、せんねん祭などをプラットフォーム化していくために、財団法人化を見据えて活動をしていく予定です。今年生まれた活動を絶やさないよう、自走化を目指していきたいと思っています。

地域の環境・経済・社会を一体的として考える、地域循環共生圏の考えに共感

高橋：ここからは、私からのご質問や、参加者の方からのご質問を元に進めていければと思います。

はじめに、地域循環共生圏作りに取り組まれ始めたきっかけについて改めて伺わせてください。石巻は、「クリエイティブで多様な循環を被災地から作る」を掲げて取組んでこられたと思うのですが、地域循環共生圏づくりの考え方と共通する点はもともと多かったのでしょうか？

松村：そうなんです。Reborn-Artの立ち上げの中心になったap bankの小林 武史さんは、もともと音楽の収益を持続可能な社会づくりや環境問題解決につなげる活動をしている方です。

ap bankを通して、地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業について知り、まさに「Reborn-Artが目指している世界に寄り添うような事業」だと感じました。そこで、「是非Reborn-Artとしても参加させていただきたい」と思い、応募させていただきました。

高橋：「経済だけではなく、環境も、社会も」という考え方は、はじめは市民の皆さんにはどのように受け止められましたか？

松村：ap bankのアジェンダの中心には環境問題がありますが、はじめのうちは地域側としてはーー僕もその一人ですけれども、環境を強く意識することはしていませんでした。

僕たちは、まずは被災地としてなんとか復興すること、これをきっかけに良い地方都市を作っていくということを目指していました。正直言っちゃうと、スタートは環境問題と聞いても、それどころではないと思っていました。

小林さんと地元の人と一緒に膝をつめて話す中で、大きな防潮堤・橋・ビルなどをつくることも大事な一つの復興の形なのですが、「それだけで本当に人が戻ってくるのか？」「維持できるのか？」といった視点に気づきました。

その時に、「内側からの復興」というキーワードが出てきました。土木インフラの復興工事で入ってくるお金だけではなく、地域で生業を作っていくことが大切だよねということです。

地域の生業を生むためには、地域にある自然や商売の仕方など、そういうことにしっかりと目を凝らさないといけないよね、ということを小林さんと話すことで気付かされました。今は、クリエイティブなまちづくりをするということは、地域の環境にしっかりと目を凝らすこととイコールなんだと思っています。

高橋：宮古島市さんはオーバーツーリズムなどの明確な危機意識がある中で、環境問題には目が向きやすかったのではと思うのですが、どうでしたか？

友利：エコアイランド宣言は2008年に出されたので、それから10年以上経ってるんですね。

その間、行政としてバイオエタノールの実証事業など環境に関する取組は行っていたのですが、市民からは「エコアイランドと言ってるけど、何がエコアイランドなの？」という疑問があったのではと思っています。

地域循環共生圏の考え方は、環境だけを良くするのではなく、環境・経済・社会の全てを一緒に良くしていこうという考え方で、宮古島市の現状と合致していると思いました。

行政と市民のパイプ役・多数意見に対して問題意識を投げ込む役…各々が考える地域循環共生圏づくりにおける役割

高橋：お2人が、地域の中で地域循環共生圏プラットフォームづくりに取組む中で、ご自分の役割をどう捉えて、何を大事にしてこられたのかお伺いしたいです。

友利：私は行政の立場ではあるのですが、一市民としての目線で宮古島市のことを良くして行くためにどうしたらいいか考えることは大切にしています。特に、地域のビジョンづくりのためのワークショップの時はそういう意識でいました。

ただ、いざ物事を進める時は、行政の立場だからこそ市民がやろうとしてることを手助けできることもあります。パイプ役として、市民の中で主導して頑張ろうとしている人と行政を上手くつなげることを大事にしています。

高橋：行政の立場から、民間でリードしてくれる人をサポートしているのですね。

宮古島市はワークショップ・せんねん祭と、民間起点の発信が多かった印象です。

友利：そうですね。ワークショップは、ファシリテーションができる民間の方と協力をしながら進めました。民間が持っているノウハウと行政ができることを組み合わせたからこそできたのかなと思っています。

松村：意識している自分の役割は2つあります。

ただ漫然と皆で意見を出し合って、多数決で物事を決めてしまうと、ともすると当たり前のことしか出てこなくなってしまうと思っています。「自分たちのまちの歴史を大事にしよう」「自然を大事にしよう」、全くその通りなのですが、日本には水も空気も美味しい場所も、緑が豊かな場所も沢山あります。漫然とそれを良いねと言い合っていてもあまり意味がありません。

僕の役割の1つ目は、時には道化的に、時には偽悪的に、多数の意見に対して問題意識を投げ込むことです。嫌なこと言ってる奴にしか聞こえないこともあるかもしれませんが、「本当にそれは意味あるの？」と言ってみたり、ちょっと変わったことをしてみることが自分の役割だと思っています。

被災地ではこれまで沢山のワークショップが開かれてきました。市民が地域に対する問題意識を出す場は沢山あったのですが、多くの場合、大きなものに対する批判ーー国・県・市に対する文句を言う場になってしまいがちなんですよね。

僕は、行政に文句を言って何になるんだと、集まっている市民一人ひとりが行動しなくてはいけないのではないかと、そういう問題意識を持っています。

行政の中にも一生懸命、まちを良くするために考えて行動している人はいます。そういう人に対して現場の情報を伝えて、うまく説得したり、変な批判が出すぎないようにするためのサポートをしています。2つ目の役割は、このようにうまく行政とつながることだと思っています。

高橋：そうした市民の方がいると、行政としてもとても心強いですね。

次の質問に移りたいと思います。特に石巻さんは地域外の協力者も多いと思いますが、地域内外の方の関係性づくりはどのようにしているのでしょう？

松村：前提として私たちは被災地だったので、皆が着の身着のまま全てを失ったことがあります。その中で、沢山のボランティアの方に助けてもらってやってきました。なので、変なプライドは横に置いて感謝をしたり、地域に外から来ていただく人と交流を楽しむことが、被災地では得意になっていると思います。

震災から10年が経過したわけですが、時間とともに薄くなる関係はあります。一方で、時間が経っても続く関係は、互いに相手を尊重できる対等な関係性です。当たり前のことですが、こうした関係を築くことが大事ですね。

高橋：そうした関係者の方とはどのように出会っているのですか？

松村：ここ数年は、復興アジェンダではなく、いかに面白いことをするかで関係者を巻き込むことを意識しているのですが、とは言え被災地だからこそ得られる出会いはあります。復興アジェンダで設けられた意見交換・ワークショップの場で地域内外の方との関係性をつくることはできてきました。

ただ、ワークショップも目的が大切だと思っています。皆が模造紙でもっともらしくアイディアを発表したとしても、そのアイディアをどうするのか説明しないなどのことが続いてしまうと、「またワークショップで集められたよね」「また綺麗な言葉でまとめられたね」と、うんざりされてしまうことになりかねないとも思うんです。

なので、本気で事業化を考えることは大事にしています。相手のバックグラウンドを踏まえながら、次のアクションをちゃんと示すことが大事だと思います。

高橋：宮古島市さんは、ビジョンづくりの時に沢山のワークショップを開催されていましたね。この時に工夫されたことはありましたか？

友利：ワークショップに協力いただいた方との出会いは、実はたまたまでした。ただ、お互いの考えていることについて膝をつめてお話をしたことで、共感を得られたのかなと思っています。

目的の達成に向けて柔軟な活用ができることが魅力の地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業

高橋：最後に、これまで地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業に取組んで来て良かったことを教えてください。

松村：他の地域との交流の機会があったことが良かったです。EPO東北さんが、東北の活動地域同士で集まる合宿を開催してくれたことが印象的です。

普段だったら会えないような方々と出会って、多様な地域の多様な取組みを知ることができるところが、すごく良いと思っています。

省庁をはじめとする行政の事業はかっちりと仕様やKPIが決まってることが当たり前だと思うのですが、プラットフォーム事業は可能な限り柔軟にしてくれているところが魅力だと思います。

「地域の事情は変わっていくよね」「事業を前に進めたら想定と変わるところもあるよね」など、地域の実情を尊重してくださって、良い変化を起こすという目的に対してどうだったのかをみてくれます。

例えば、地域の方と対話して出てきた新しいアイデアを踏まえて、事業期間の中でハンドルを切ることも認めてくれる。その大らかさによって、地域の方を巻き込みやすくなっていると思います。

友利：この事業をとおして宮古島市の色々な方とつながりが持てました。事業の間に知り合った方にも、事業に関わってもらえるような、窓口の広さが魅力だと思います。松村さんと同じで、本当に懐の深い事業だと感じています。

他の地域の取組について知ることができることで、自分たちの取組についてもワンランク上げていきたいと、より思えるようになりました。

これからも引き続き、エコアイランド宮古島に近づけるよう挑戦していきたいと思っています。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「 寺子屋ローカルSDGs」学び編では、こうした講義に加え、後半は質疑応答やカジュアルな意見交換の場を設け、より生々しいノウハウの共有を行っています。

「寺子屋ローカルSDGs」は、原則として、地域循環共生圏づくりプラットフォームの登録団体（地域・企業等）またはメールマガジン配信者向けのプログラムとなります。参加されたい場合、まずは地域・企業・個人いずれかでの各種登録をご検討ください。個人配信ならばすぐにご参加いただけます。

◆実践登録地域制度についてはこちらから。

http://chiikijunkan.env.go.jp/tsunagaru/chiiki_touroku/

◆企業等登録制度についてはこちらから。

http://chiikijunkan.env.go.jp/deau/kigyo_touroku/

◆個別メールマガジン配信についてはこちらから、トップページ下部をご覧ください。

http://chiikijunkan.env.go.jp/